**2016年4月7日 詩編を読もう：心配あろうが右におられる方(詩編121編)**

今週も「都に上る歌」から、先週の122編からひとつさかのぼって、121編を読みたい。聖書日課では、来週の月曜から水曜日に与えられている詩編となる。いつものように、気になる言葉、あるいはインパクトのあった言葉や節は何かを挙げる。次に、詩編の作者の気持ちになってどのようなことを詠っているか、考える。そして神は、今の私たちに何を語っているのか、思いを巡らせよう。

詩編/ 121編

1：【都に上る歌。】目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。

2：わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。

3：どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。

4：見よ、イスラエルを見守る方は／まどろむことなく、眠ることもない。

5：主はあなたを見守る方／あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。

6：昼、太陽はあなたを撃つことがなく／夜、月もあなたを撃つことがない。

7：主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように。

8：あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに。

気になる言葉やインパクトのある言葉、「わたしの助けはどこから来るのか」という、不安、心配に満ちた言葉。

詩編作者の気持ちになって、与えられた詩編を振り返ろう。先週も書いたように、詩編120編から134編は、「都に上る歌」であり、イスラエルの民がエルサレムに向かうときの歌。　今日の121編は、詩編作者の大きな不安が表明されてはじまる。　これからエルサレムに向かうが、目をあげて、私は山々を仰ぐものの、いったい危険も待ち受けていそうだし、わたしの助けはどこから来るのだろうか(1節)。しかし、わたしの助けは、天地を創造された主から来ると、自分に言い聞かせている(2節)。2節までは作者自身の言葉で、3節以降は、作者はだれかからの言葉を背後から聞いているような感じになってくる。そして、3,7,8節の祈りにはさまれて、4-7節では、旅路の安全が約束されていることが詠われている。どうか主があなたを助け、よろめかないように、またまどろんだりしないように(3節)。イスラエルの民を見守る方は、休むことはない、主はあなたを見守り続け、覆う陰のような方であり、いつも右にいてくださる、星や太陽あるいは夜の月があなたを撃つようなことは決してない(4-6節)。主がすべての災いを遠ざけ、あなたとその魂を見守ってくださるように、旅の最初から最後まで、そして、今も、いつの世も、永遠に(7-8節)。

さて、この詩編の言葉を通し、主なる神は、今日、私たちに何を語りかけているのか思いを巡らせたい。4月10日の礼拝では、ヨハネ21章の1節から19節までが読まれる。　復活後のイエスが、弟子たちに二度ほど顕われてはいたが、弟子たちは、残りの人生、なにをしてよいかわからなかった。　人生に不安を覚え、生計をどう立てるか、結局、イエスに従うために捨てたはずの網だったのに、またガリラヤ湖に戻り、漁業に従事しようとしたがうまくゆかなかった。弟子たちにはイエスが三度、顕われてくださったが、最初はそれがだれだかわからなかった。しかし、その方の言われる通りに、網を打ったところ、奇跡的なことがおこる。　詩編121編と、さらに福音書のストーリを読む時、私たちのイエスの体である教会につながる信仰生活においても、いったいどうしたら良いのだろか？と疑問をいだくような事態に陥ることはあることを覚える。不安や恐れを覚えたときのために、この121編3節以降の言葉が与えられているのかと思う。とくに日本語部は、毎週日本語で礼拝を守ってきたが、今後は、毎月第二、四、そして第五があるときは第五も英語の礼拝に交わるようになる。ご自身の信仰の旅路に不安や心配を覚える方々もいると思う。しかし、その信仰の旅路は、常に、主なるお方に見守られ、主なるお方は、すぐそばに付き添っていてくださる。　最初から最後まで、今も、そしてどんな時代が来ようとも。主のいつくしみは永遠にある。

アーメン

安達均